

平成 26 年度

病害虫発生予報第 3 号

平成 26 年 6 月 26 日

三重県病害虫防除所

515-2316 三重県松阪市嬉野川北町 530

TEL 0598-42-6365 Fax 0598-42-7568

ホームページ<http://www.mate.pref.mie.lg.jp/boiyosyo/>

目 次

	ページ
1. 向こう 1 か月の予報と対策	1
2. 作物別の状況	2
3. 発生時期・発生量(平年比)の予察根拠	9
4. 予察項目の見方	16
5. 今月のトピックス(イネいもち病について)	17
6. 気象のデータ	18
7. おしらせ	20

1. 向こう 1 か月の予報と対策

1) 作物

イネでは、葉いもちの発生量はやや多、穂いもちの発生時期は平年並、発生量はやや多と予想されます。圃場を見回り、早期発見、早期防除に努めてください。斑点米カメムシ類の発生量はやや多と予想されます。畦畔など、圃場周辺の除草に努めてください。セジロウンカの発生時期および発生量は平年並と予想されます。白葉枯病、イネクロカメムシ、ツマグロヨコバイの発生量は平年並と予想されます。紋枯病の発生時期は平年並、発生量はやや少と予想されます。

2) 果樹

カンキツでは、チャノキイロアザミウマの発生量はやや多と予想されます。果実への寄生状況を丁寧に確認して、防除を実施してください。そうか病、黒点病、かいはよう病(温州)、ミカンハダニの発生量は平年並と予想されます。かいはよう病(中晩柑)の発生量はやや少と予想されます。

ナシでは、黒星病、ハダニ類の発生量は平年並と予想されます。

ブドウでは、べと病の発生量は平年並と予想されます。

果樹共通では、果樹カメムシ類の発生量は多と予想されます。特にこの時期は、ナシ(無袋栽培)、カキが加害されるおそれがありますので、圃場をよく見回って飛来の状況を確認してください。

3) 茶

チャでは、クワシロカイガラムシの発生時期は平年並、発生量はやや多と予想されます。第 2 世代の幼虫孵化最盛日は 7 月第 4 半旬と予想されます。チャノコカクモンハマキの発生量はやや多と予想されます。幼虫の発生状況に注意して防除してください。炭疽病、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマの発生量は平年並、カンザワハダニの発生量はやや少、チャノホソガの発生量は少と予想されます。

4) 野菜

イチゴでは、ハダニ類の発生量はやや多と予想されます。圃場全体をよく観察し、発生程度の低いうちに徹底して薬剤防除を行ってください。うどんこ病、炭疽病の発生量は平年並と予想されます。

ネギでは、ネギコガの発生量は平年並と予想されます。

農薬はラベルの表示を確認して、正しく使用してください。

2. 作物別の状況

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項
						6月	7月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
イネ	葉いもち	-	やや多	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 病害虫防除技術情報第4号(6月17日発表)。 2) 圃場を見回り、早期発見、早期防除に努めてください。 3) 補植用置き苗は発生源となるので、速やかに取り除いてください。 4) いもち病発生予測支援システム(ブラスタム)によると、6月下旬以降、本田で発病が確認され始めると予想されます。 5) 雨天が続く可能性があるため、天気予報を参考にしながら、雨の合間を見計らって防除してください。
	穂いもち	平年並	やや多	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 上位葉の葉いもち病斑が伝染源となります。 2) 圃場および周辺圃場での葉いもちの発生状況に注意してください。 3) 薬剤散布は出穂始めから穂揃い期に予防的に行ってください。
	紋枯病	平年並	やや少	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 幼穂形成期頃(穂肥時期)から発生が目立つようになります。 2) 水面に近い茎から茎へ感染します。薬剤散布によって病斑の上位葉への進展を阻止してください。
	白葉枯病	-	平年並	小	低					<ol style="list-style-type: none"> 1) 深水、冠水、台風によって感染や発病が助長されます。 2) 常発地では台風直後に薬剤散布をしましょう。予防的な薬剤散布は効果が高いです。 3) 「みえのゆめ」は耐病性の弱い品種なので注意してください。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						6月	7月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
イネ	斑点米カメムシ類	-	やや多	小	高		<ol style="list-style-type: none"> 1) 病害虫防除技術情報第5号(6月17日発表)。 2) 畦畔などのイネ科雑草で増殖します。草刈りをこまめに行い、イネ科雑草の穂がつかないように管理してください。 3) 水田内で雑草が多発すると、水田への侵入を助長するため、早めに除去しましょう。 4) 草刈りは出穂 10 日前までに行いましょう。出穂直前および出穂後の草刈りは、水田への侵入を助長するおそれがあります。 			
	イネクロカメムシ	-	平年並	小	普通		<ol style="list-style-type: none"> 1) 常発地で薬剤散布する場合は、越冬成虫の発生量がピークとなる6月下旬に実施してください。 2) 日中は株元に潜んでいるので、夕方や曇天の日に薬剤散布を行うと効果的です。 			
	ツマグロヨコバイ	-	平年並	中	低		<ol style="list-style-type: none"> 1) 当面、防除が必要な密度には達しないと思われます。 			
	セジロウンカ	平年並	平年並	小	低		<ol style="list-style-type: none"> 1) 例年、被害の発生はごく局所的であるため、多飛来が認められた場合は、病害虫防除技術情報で臨時発表します。 			
カンキツ	そうか病	-	平年並	小	普通		<ol style="list-style-type: none"> 1) 常発圃場や昨年多発した圃場、幼木園、高接ぎ更新園の温州みかんでは、発生に注意してください。 2) 果実への感染は梅雨末期頃までといわれています。 			

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項		
			平年比	平年比		程度	平年比	6月			7月	
								下旬	中旬		下旬	中旬
カンキツ	黒点病	-	平年並	小	普通	発病密度					<ol style="list-style-type: none"> 1) 枯枝が伝染源です。梅雨時期の枯枝発生に注意し、樹冠内や圃場内の枯枝を除去してください。 2) 薬剤散布は前回の散布後に積算降水量が200～300mmに達した時を目安に実施してください。 	
	かいよう病	-	温州 平年並	温州 小	温州 低	発病密度					<ol style="list-style-type: none"> 1) 降雨があると急速に感染が広がるので、発生圃場では雨の合間に防除してください。 2) 発病枝葉、果実は、見つけ次第剪除し処分してください。 3) 幼木や高接樹ではミカンハモグリガの被害部に発病しやすいので、ミカンハモグリガの防除を実施してください。 4) 中晩柑類では、梅雨期頃から10月中下旬頃まで、果実への感染が起こります。 	
	ミカンハダニ	-	平年並	小	普通	ダニ密度					<ol style="list-style-type: none"> 1) 発生密度が高くなると防除が困難になります。1葉当りの雌成虫発生数が0.5～1.0頭程度を目安に防除してください。 2) 薬剤は葉裏にもかかるように散布してください。 3) 同一系統薬剤の連用は避けてください。 	
	チャノキイロアザミウマ	-	やや多	小	普通	成虫密度					<ol style="list-style-type: none"> 1) 寄生果率10%を目安に防除してください。 2) 7月になり果実肥大が進むと果頂部で加害します。 3) 圃場周辺のイヌマキ・サンゴジュ・チャ等が発生源となります。 	
ナシ	黒星病	-	平年並	小	普通	発病密度					<ol style="list-style-type: none"> 1) 発病果及び発病葉は除去して、圃場外に持ち出し処分してください。 2) 発病が確認される圃場では、すみやかに防除を計画してください。 3) 薬剤散布を実施するときは薬剤をていねいに散布し、同一系統薬剤の連用を避けてください。 	

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項
						6月	7月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
ナシ	ハダニ類	-	平年並	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 1葉当り寄生数が1~2頭で防除を実施してください。 2) 7~8月に密度が高くなります。徒長枝での発生にも注意してください。 3) 同一系統薬剤の連用は避けてください。
ブドウ	べと病	-	平年並	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 降雨が連続すると、病徴が急速に進展するので、葉裏に病斑を認めたら直ちに薬剤を散布してください。 2) 降雨の合間に防除を計画してください。 3) 被害葉及び被害落葉は感染源となるので圃場外に持ち出して処分してください。 4) 同一系統薬剤の連用を避けてください。
果樹共通	カメムシ類	-	多	大	高					<ol style="list-style-type: none"> 1) 一時的に圃場への飛来が減る場合がありますが、7月後半以降で再び飛来数が増加する可能性がありますので注意が必要です。 2) ナシ(無袋栽培)、カキでは、まとまった飛来を確認したら、防除を実施してください。 3) 中山間地や以前多発したことがある地域では、圃場への飛来に注意してください。
チャ	炭疽病	-	平年並	中	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 新芽の1葉期前後の時期に感染し易く、潜伏期間の15~20日を経て発病します。 2) 二番茶摘採後にせん枝を行い、発生を抑制しましょう。
	カンザワハダニ	-	やや少	小	普通					<ol style="list-style-type: none"> 1) 年間10世代程度発生します。 2) 新葉を加害し、葉の黄化、褐変を招き多発すると落葉します。 3) 天敵に影響の少ない農薬の使用を心がけましょう。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項	
						6月	7月				
						下旬	上旬	中旬	下旬		
チャ	チャノホソガ	-	少	小	低	成虫密度					<ul style="list-style-type: none"> 1) 年間 6~7 世代発生します。 2) 防除適期は潜葉期(絵描き状態)です。 3) 病害虫防除所ホームページにフェロモントラップ誘殺状況を掲載していますので参考にしてください。
	チャノミドリヒメヨコバイ	-	平年並	小	普通	成虫密度					<ul style="list-style-type: none"> 1) 年間 5~8 回発生し、新芽を加害します。葉先が褐変し、ひどくなると落葉します。 2) 三番茶の萌芽~開葉初期に防除しましょう。
	チャノキイロアザミウマ	-	平年並	中	普通	成虫密度					<ul style="list-style-type: none"> 1) 年間 7~8 回発生し、新芽を加害します。萌芽初期に芽の芯から加害し、条痕となります。 2) 三番茶の萌芽~開葉初期に防除しましょう。
	クワシロカイガラムシ	平年並	やや多	中	普通				第二世代幼虫孵化		<ul style="list-style-type: none"> 1) 年 3 回発生します。孵化最盛期の 2~5 日後が防除適期です。 2) 有効積算温度による発生消長予測式では、第 2 世代幼虫の孵化最盛日は、7 月第 4 半旬頃と平年より 2~3 日早いと予測されます。 3) 歩行型幼虫の発生状況をルーペ等で実際に確認して防除しましょう。 4) 孵化最盛予測日にかかる時期にスプリンクラーで断続的に 2 週間程度散水すると効果があるとされます。 5) 天敵に影響の少ない農薬の使用を心がけ、枝幹に十分かかる様に散布しましょう。

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生消長の一例				防除の注意事項
						6月	7月			
						下旬	上旬	中旬	下旬	
チャ	チャノコカクモンハマキ	-	やや多	小	普通		<ul style="list-style-type: none"> 1) 年間4世代発生します。防除適期は誘殺ピークの7～15日後です。 2) 病害虫防除所ホームページにフェロモントラップ誘殺状況を掲載していますので参考にしてください。 3) 次世代以降の発生を抑えるには性フェロモン剤(交信かく乱剤)を圃地単位で導入することも効果があるとされます。 4) 薬剤抵抗性の発達を避けるため同一系統薬剤の連用は避けましょう。 			
イチゴ	うどんこ病	-	平年並	中	普通		<ul style="list-style-type: none"> 1) 育苗期の防除を徹底してください。 2) 薬剤防除は予防散布に努めます。葉裏から発生しやすいので、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布してください。 3) 発病を認めたときは、集中的に散布して感染拡大を防いでください。 			
	炭疽病	-	平年並	中	普通		<ul style="list-style-type: none"> 1) 病原菌は高温多湿条件を好み、梅雨時期以降に発生が多くなるため、十分な注意が必要です。 2) 病原菌(孢子)を含む水の跳ね返りで感染が拡大します。頭上灌水は避け、株を濡らさないようにしてください。 3) 発病株は感染源となるため、周辺株を含めて直ちに除去し、処分してください。 4) 薬剤防除は、薬液が株元まで十分かかるよう丁寧に散布してください。 			
	ハダニ類	-	やや多	小	高		<ul style="list-style-type: none"> 1) 作物残渣から歩行によって移動します。葉かき後の残渣は圃場外に持ち出し、速やかに処分してください。 2) 多発すると防除が困難になります。早期発見に努め、発生初期に防除を行ってください。 3) 散布は葉裏を中心に丁寧に行ってください。 4) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一系統薬剤の連用は避けてください。 			

作物名	病害虫名	発生時期	発生量		要防除圃場率	発生活消長の一例				防除の注意事項	
						6月	7月				
		平年比	平年比	程度	平年比	下旬	上旬	中旬	下旬		
ネギ	ネギコガ	-	平年並	小	普通	成虫密度 					<p>1) 春から秋にかけて4~5回発生します。</p> <p>2) 幼虫は葉の内部に潜り、表皮を残して食害します。潜入防止のため、発生初期から防除を行うことが重要です。</p>

3. 発生時期・発生量(平年比)の予察根拠

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	葉いもち	-	やや多	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 1か月予報(6月19日発表)によると、平年に比べ曇りや雨の日が多く、降水量は平年並か多い予想 (+) 2) プラストム(6月22日現在)によると、感染好適条件は6月11日~12日、19日および22日に、県内の広範囲で繰り返し出現 (+) 3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、本田における発生圃場率0%(平年0.03%)と平年並に少ない傾向 (±) 4) 一般圃場では、発生量は無~平年並(概して平年並に少)だが、一部地域で初発を確認 (+) <p>考察: プラストムによる判定結果および今後の気象条件を重視して、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	穂いもち	平年並	やや多	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 農業研究所作況試験田(4月24日移植コシヒカリ、移植60日目)によると、葉齢の進展は平年並(発生時期±) 2) 水稲生育予測システム(津アメダスデータ、4月25日移植コシヒカリ、6月22日現在)によると、予想出穂期は7月18日頃(平年7月18日頃)と平年並の予想(発生時期±) 3) 一般圃場では、葉齢の進展は平年並~やや早(概して平年並)(発生時期±) 4) 葉いもち発生量はやや多の予想 (+) <p>考察: 水稲の生育状況を考慮して、予想発生時期は平年並、葉いもちの予想発生量を考慮して、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	紋枯病	平年並	やや少	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 農業研究所作況試験田(4月24日移植コシヒカリ、移植60日目)によると、葉齢の進展は平年並、茎数はやや少の傾向(発生時期±、発生量-) 2) 巡回調査圃場(昨年8月)では、発生圃場率26.3%(平年28.7%)とやや少、発病度1.3(平年2.1)と少(-) 3) 一般圃場では、葉齢の進展は平年並~やや早(概して平年並)、茎数はやや少~やや多(概して平年並)(発生時期±、発生量±) <p>考察: 水稲の生育状況から予想発生時期は平年並、感染源となる越冬菌核量はやや少と考えられ、予想発生量はやや少と考えます。</p>
	白葉枯病	-	平年並	<p>要因</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 1か月予報(6月19日発表)によると、降水量は平年並か多い予想 (+) 2) 県内では4月以降、激しい風を伴う大雨はなし (-) <p>考察: これまでのところ、激しい風雨による冠水の機会は少なく、今後の気象条件を考慮して、予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イネ	斑点米カメムシ類	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(4月第1半旬~6月第3半旬)では、誘殺数はアカスジカスミカメ23頭(平年9.8頭)と多、アカヒゲホソミドリカスミカメ123頭(平年22.4頭)と多 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、畦畔イネ科雑草すくい取りによる発生地点率および成幼虫数は、ホソハリカメムシで5.1%(平年10.5%)と少、0.09頭(平年0.2頭)と少、クモヘリカメムシで0%(平年0.2%)と平年並に少、0頭(平年0.01頭)と平年並に少、シラホシカメムシ類で9.5%(平年5.9%)と多、0.2頭(平年0.09頭)と多、アカスジカスミカメで55.1%(平年28.8%)と多、3.4頭(平年1.6頭)と多 (+)</p> <p>考察: 予察灯、巡回調査結果から、予想発生量はやや多と考えます。</p>
	イネクロカメムシ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(4月第1半旬~6月第3半旬)では、誘殺数は水田位置10頭(平年6.2頭)と多、畑位置226頭(平年177.7頭)と多 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発生圃場率6.3%(平年4.3%)と多、25株当たり成虫数0.01頭(平年0.05頭)と少 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無~平年並(概して平年並に少) (±)</p> <p>考察: 巡回調査結果、一般圃場の発生状況を重視して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	ツマグロヨコバイ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(4月第1半旬~6月第3半旬)では、誘殺数は松阪市・水田位置1頭(平年0.6頭)、伊賀市0頭(平年0頭)、紀北町0頭(平年0.1頭)、御浜町0頭(平年0.3頭)とそれぞれ平年並に少ない傾向、松阪市・畑位置98頭(7年平均85.5頭)と平年並の傾向 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、払い落とし成幼虫数0.2頭(平年0.3頭)と平年並 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無~平年並(概して平年並に少) (±)</p> <p>考察: 予察灯、巡回調査結果、一般圃場の発生状況から、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	セジロウンカ	平年並	平年並	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(県内4か所)では、6月21日現在、未飛来(松阪市・平年初飛来7月6日) (発生時期±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、払い落とし成虫数は0頭(平年0.003頭)と平年並に少ない傾向 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無 (±)</p> <p>4) ウンカ飛来状況(JPP-NET)によると、九州では6月中旬まで多飛来は無 (-)</p> <p>考察: これまでの飛来状況から発生時期は平年並、現在の飛来状況から当面は密度が大きく上昇することはないと予想されるため、予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
カンキツ	そうか病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月19日発表)によると、平年に比べ曇りや雨の日が多く、降水量は平年並か多い予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃(6月中旬、無防除)では、春葉発病率 90.5%(平年 57.8%)と多、発病果率 98.3%(平年 54.9%)と多 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、春葉発病度 0(平年 0.1)と平年並 (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察：巡回調査結果、一般圃場の発生状況を重視して、現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
	黒点病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月19日発表)によると、平年に比べ曇りや雨の日が多く、降水量は平年並か多い予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃(6月中旬、無防除)では、果実発病率 36.7%(平年 39.1%)と平年並 (±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、春葉発病度 0.6(平年 1.3)と平年並 (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>5) 感染源となる枯枝は平年並 (±)</p> <p>考察：県予察圃、巡回調査結果、一般圃場の発生状況から、現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
	かいはう病	-	温州 平年並 中晩柑 やや少	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月19日発表)によると、平年に比べ曇りや雨の日が多く、降水量は平年並か多い予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃(中晩柑)における果実での初発は、6月16日現在未確認(平年6月7日)と遅 (-)</p> <p>3) 県予察圃(6月中旬、新甘夏、無防除)では、春葉発病率 0%(平年 7.9%)と少、発病果率 0%(平年 1.6%)とやや少 (-)</p> <p>4) 巡回調査圃場(6月第2週)では、春葉発病率は温州みかんでは 0%(平年 0.3%)と平年並、中晩柑では 1.0%(平年 4.1%)とやや少 (-)</p> <p>5) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察：温州みかんでは、現状の発生量は平年並に少ないと考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。中晩柑類では、現状の発生量は少～平年並(概してやや少)と考えられ、引き続き予想発生量はやや少と考えます。</p>
	ミカンハダニ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃(6月中旬)では、100 葉当り寄生頭数は無防除区 151.1 頭(平年 17.4 頭)と多、慣行防除区 41.1 頭(平年 2.6 頭)と多 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発生圃場率 69.2%(平年 48.5%)と多、春葉寄生率 8.3%(平年 10.9%)と平年並、寄生頭数 0.14 頭/葉(平年 0.66 頭/葉)と平年並 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量はやや少～平年並(概して平年並) (±)</p> <p>考察：巡回調査結果および一般圃場の発生状況を重視して、現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
カンキツ	チャノキイロアザミウマ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 県予察圃黄色粘着トラップ(6月上旬、無防除)では、誘殺数 15.1 頭/日(平年 0.41 頭/日)と多 (+)</p> <p>2) 県予察圃(6月中旬、無防除)では、100 果当り寄生虫数 0 頭(平年 1.04 頭)と平年並 (±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、被害果率 0%(9年平均 0.5%)と平年並の傾向 (±)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は平年並～やや多(概して平年並) (±)</p> <p>考察：巡回調査結果および一般圃場の発生状況を重視して、現状の発生量は平年並と考えられますが、誘引トラップの誘殺状況を重視して、今後の予想発生量はやや多と考えます。</p>
ナシ	黒星病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月19日発表)によると、平年に比べ曇りや雨の日が多く、降水量は平年並か多い予想 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、一部の圃場で発生が多いことから発病葉率 2.7%(平年 1.7%)とやや多 (+)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量はやや少 (-)</p> <p>考察：現状の発生量はやや少と考えられますが、巡回調査結果および今後の気象条件を重視して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	ハダニ類	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 巡回調査圃場(6月第2週)では、寄生葉率 0%(平年 1.0%、ただし 8 か年は 0%)と平年並、寄生頭数 0 頭/葉(平年 0.05 頭/葉)と平年並 (±)</p> <p>2) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察：現状の発生量は平年並に少ないと考えられ、大きな増加の要因はなく、予想発生量は平年並と考えます。</p>
ブドウ	べと病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月19日発表)によると、平年に比べ曇りや雨の日が多く、降水量は平年並か多い予想 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発病葉率 0%(平年 0.1%)と平年並 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並 (±)</p> <p>考察：現状の発生量は平年並に少ないと考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
果樹共通	カメムシ類	-	多	<p>要因</p> <p>1) 予察灯(御浜町:6月1日~10日)では、誘殺数はチャバネアオカメムシ 344 頭(平年 439.7 頭)と平年並であったが、ツヤアオカメムシは 282 頭(平年 67.5 頭)と多 (+)</p> <p>2) 予察灯(畑・松阪市:5月21日~6月20日)では、誘殺数はチャバネアオカメムシ 8246 頭(平年 643.8 頭)と多、ツヤアオカメムシ 1074 頭(平年 214.7 頭)と多 (+)</p> <p>3) フェロモントラップ(5月17日~6月16日)では、チャバネアオカメムシ誘殺数は、山地(津市白山町川口)で 477 頭(平年 196.4 頭)、中間地(津市白山町二本木)で 1224 頭(平年 503.6 頭)、平坦地(松阪市嬉野川北町)で 324 頭(平年 80.7 頭)といずれ也多 (+)</p> <p>4) 巡回調査圃場(6月第2週、カンキツ・ナシ・カキ圃場)では、叩き落とし、または見取り調査による飛来は未確認 (-)</p> <p>5) 一般圃場では、発生量は多 (+)</p> <p>考察: 現状の発生量は多と考えられ、今後1か月間に圃場へ飛来する予想発生量は多と考えます。</p>
	炭疽病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月19日発表)によると、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想 (+)</p> <p>2) 県予察圃(一番茶期)では、発病葉数 0 枚/m²(平年 0 枚/m²)と平年並 (±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発生圃場率 5.6%(平年 6.2%)と平年並、新葉発病葉数 0.1 枚/m²(平年 0.2 枚/m²)と少 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや少 (-)</p> <p>考察: 現状の発生量はやや少と考えられますが、今後の増加を考慮して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	カンザワハダニ	-	やや少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月19日発表)によると、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想 (-)</p> <p>2) 県予察圃(6月上旬)では、寄生葉率 0%(平年 4.6%)と少、寄生頭数 0 頭(平年 0.2 頭)と少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発生圃場率 27.3%(平年 31.0%)とやや少、寄生葉数 5.0%(平年 5.0%)と平年並、寄生頭数 0.1 頭(平年 0.2 頭)とやや少 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少 (-)</p> <p>考察: 現状の発生量はやや少と考えられ、引き続き予想発生量はやや少と考えます。</p>
	チャノホソガ	-	少	<p>要因</p> <p>1) 1か月予報(6月19日発表)によると、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想 (-)</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ(5月第4半旬~6月第3半旬)では、誘殺数 710 頭(平年 3135 頭)と少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、巻葉数 0 枚/m²(平年 0.4 枚/m²)と少 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は少 (-)</p> <p>考察: 現状の発生量は少と考えられ、引き続き予想発生量は少と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
チャ	チャノミドリヒメヨコバイ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月19日発表)によると、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想 (-)</p> <p>2) 県予察圃吸引粘着トラップ(5月第4半旬~6月第3半旬)では、捕殺数6頭(平年9.5頭)と少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、叩き落とし虫数0.8頭(平年1.5頭)と少 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや多 (+)</p> <p>考察：現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
	チャノキイロアザミウマ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月19日発表)によると、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想 (-)</p> <p>2) 県予察圃吸引粘着トラップ(5月第4半旬~6月第3半旬)では、捕殺数1727頭(平年2440.4頭)と少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、叩き落とし虫数2.9頭(平年12.3頭)と少 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや多 (+)</p> <p>考察：現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>
	クワシロカイガラムシ	平年並	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月19日発表)によると、平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (-)</p> <p>2) 有効積算温度による第2世代孵化最盛予測日は7月16日頃(平年7月19日頃) (発生時期±)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、雄繭寄生株率21.2%(平年8.6%)と多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや多 (+)</p> <p>考察：発生時期;平年並、現状の発生量はやや多と考えられ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>
	チャノコカクモンハマキ	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月19日発表)によると、平年と同様に曇りや雨の日が多い予想 (-)</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ(5月第4半旬~6月第3半旬)では、誘殺数130頭(平年104頭)と多 (+)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、ハマキムシ類巻葉数0枚/m²(平年0.4枚/m²)と少 (-)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量はやや多 (+)</p> <p>考察：現状の発生量はやや多と考えられ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>
イチゴ	うどんこ病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月19日発表)によると、平年に比べ曇りや雨の日が多い予想 (±)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発病株率1.7%(平年11.1%)と少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は少~やや多(概して平年並) (±)</p> <p>考察：現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>

作物名	病害虫名	発生時期 平年比	発生量 平年比	予察根拠
イチゴ	炭疽病	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月19日発表)によると、平年に比べ曇りや雨の日が多く、降水量は平年並か多い予想 (+)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、発病株率0%(平年0%)と平年並に少 (±)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は無~少(概して少) (-)</p> <p>考察：現状の発生量は少と考えられますが、気象要因による今後の増加を考慮して、予想発生量は平年並と考えます。</p>
	ハダニ類	-	やや多	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月19日発表)によると、平年に比べ曇りや雨の日が多く、降水量は平年並か多い予想 (-)</p> <p>2) 巡回調査圃場(6月第2週)では、寄生株率4.7%(平年8.5%)と少 (-)</p> <p>3) 一般圃場では、発生量は平年並~やや多(概してやや多) (+)</p> <p>考察：一般圃場での発生状況を重視して、現状の発生量はやや多と考えられ、引き続き予想発生量はやや多と考えます。</p>
ネギ	ネギコガ	-	平年並	<p>要因</p> <p>1) 1 か月予報(6月19日発表)によると、平年に比べ曇りや雨の日が多く、降水量は平年並か多い予想 (-)</p> <p>2) 県予察圃フェロモントラップ(5月第5半旬~6月第4半旬)では、誘殺数は60頭(平年231.9頭)と少 (-)</p> <p>3) 巡回調査圃場(6月第2週)では、被害葉率0.5%(平年0.3%)とやや多 (+)</p> <p>4) 一般圃場では、発生量は無~微(概して平年並に少) (±)</p> <p>考察：一般圃場での発生状況を重視して、現状の発生量は平年並と考えられ、引き続き予想発生量は平年並と考えます。</p>

4. 予察項目の見方

1) 「作物別の状況」の見方

発生時期(平年比): 平年の発生日からの差を「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階評価で予測します。ただし、発生時期が毎年大きく変化する病害虫では、日数の基準が下記より大きくなります。発生時期を予察する意義の小さい病害虫では予察しません。

日数	-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年発生日	1	2	3	4	5	6	
評価	早	やや早		平年並				やや遅			遅			

発生量(平年比): 発生密度の平年値からの差を「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階評価で予測します。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少」でも見かけ上は多いと感じることがあります。

			平年値 ↓			
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少	やや少	平年並	やや多	多	

発生量(程度): 発生程度を「小、中、大、甚」の4段階評価で予測します。評価の基準値は病害虫毎に異なりますが、大雑把には、「見た目の多さ・少なさ」です。甚になるほど見た目は多くなり、小になるほど見た目は少なくなります。「発生量(平年比)」と比

べることによって、「平年並に発生程度が小さい」「発生程度は大きい平年並の発生量である」「平年より多いが、発生程度は小さい」「平年よりやや少ないが、依然として発生程度は中くらいである」等のように判断してください。

小	中	大	甚
---	---	---	---

要防除圃場率(平年比): 防除の必要性の目安を「低、普通、高」の3段階評価で予測します。「普通」であれば、県下の大半の圃場では防除暦に沿った通常の防除が必要と予想されます。「高」であれば、防除時期の見直しや追加防除などが必要になると予想されます。「低」であれば、防除回数を減らせるか、防除しなくても済むと予想されます。

低	普通	高
---	----	---

発生消長の一例: 発生予報は向こう1か月の予報ですが、その前後を合わせて40日ほどの病害虫の発生消長の一例をグラフで示します。大まかな目安として利用してください。

防除の注意事項: 向こう1か月の病害虫の特性と防除に関する説明です。

2) 「発生時期・発生量(平年日)の予察根拠」の見方

(±): 平年並の要因

(+): 発生量増加または発生時期遅延の要因

(-): 発生量減少または発生時期早期化の要因

5. 今月のトピックス「イネいもち病について」

本病はイネの最も重要な病害です。三重県では、最近では 2011 年に多発し、日照不足とともに登熟不足による減収の一因となりました。

被害の様子

苗いもち:育苗箱では、播種 1 週目頃から、鞘葉全体が暗灰色または褐変し、胞子を作ります。また、1.5 葉期以降は、苗が萎縮し、地際部が褐変、枯死します。

葉いもち:初期には、円形または楕円形で、灰緑色または暗緑色の水浸状の病斑を生じます。後に紡錘形や長菱形の褐色病斑となります(図 1a)。

穂いもち:穂首、みご、穂軸、枝梗、籾、護穎が侵されます。穂首節は淡褐色から黒褐色、灰白色となり、水分供給が断たれて白穂となります(図 1b)。

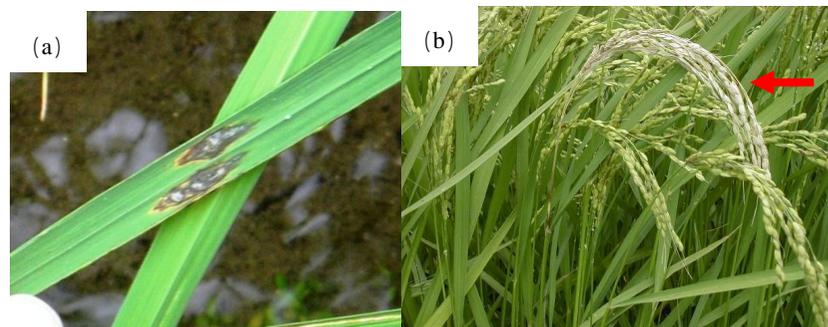


図 1
葉いもち病斑
(a)と、穂いもち
による白穂(b)

伝染経路(図 2)

本病は種子伝染します。罹病種子が育苗箱内で露出していると、苗いもちを発病します。本田では、補植用の置き苗が早期に発病し、主要な伝染源となります。葉いもちは、三重県では 6 月中下旬から広域で確認され、7 月下旬の梅雨明けまで流行します。上位葉の葉いもち病斑は、穂いもちの伝染源となります。

防除のポイント(図 2)

- (1) 種子更新を行い、健全な種子を使用しましょう。
- (2) 塩水選で罹病種子を除き、種子消毒を確実に行いましょう。

- (3) 常発地では、長期残効型の育苗箱施用剤が有効です。
- (4) 補植用の置き苗は速やかに除去し、枯死させてください。
- (5) 葉いもちの早期発見、早期防除に努めてください。初発段階には予防粒剤が効果的です。発生が目立つ場合は、治療効果の高い液剤、粉剤で防除しましょう。
- (6) 穂いもち防除は、出穂始めから穂揃い期に薬剤散布してください。

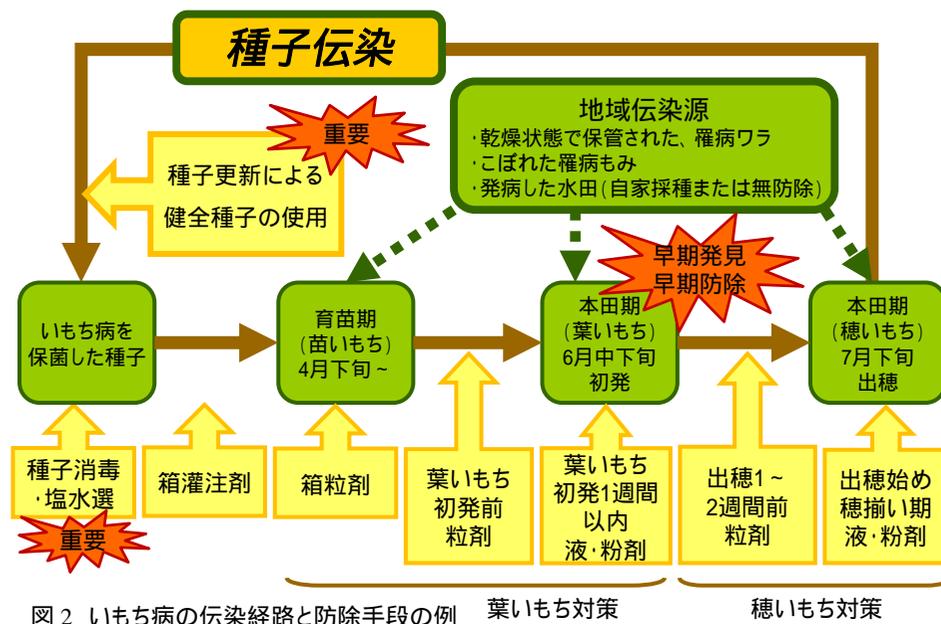


図 2 いもち病の伝染経路と防除手段の例

薬剤耐性菌の発生を防止しましょう

QoI 剤(ストロビルリン系殺菌剤。商品名:嵐、アミスター、イモチエース、オリブライなど)耐性イネいもち病菌が、西日本の 12 府県で発生し、問題になっています。

三重県での発生は確認されていませんが、耐性菌の発生を防ぐために、QoI 剤の使用は最大年 1 回までとしてください。

QoI 剤を使用したにもかかわらず、ずり込み症状など発病の重篤な時は、病害虫防除所、農業研究所、農業改良普及センターや、関係団体へ早急に御連絡ください。

東海地方1か月予報 (平成26年6月19日 名古屋地方気象台発表)

前線や湿った気流の影響で、東海地方の向こう1か月の降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ない見込みです。また、向こう1か月間の気温はほぼ平年並の見込みです。

1週目 6月21日～27日	梅雨前線や低気圧の影響で雲が広がりやすく、期間のはじめは雨の降る日があるでしょう。	津の降水日数・晴れ日数の平年値 3.2日・2.4日
2週目 6月28日～7月4日	前線や湿った気流の影響で、平年に比べ曇りや雨の日が多い見込みです。	同 3.0日・2.6日
3～4週目 7月5日～18日	前線や湿った気流の影響で平年と同様に曇りや雨の日が多い見込みです。	同 5.5日・6.1日

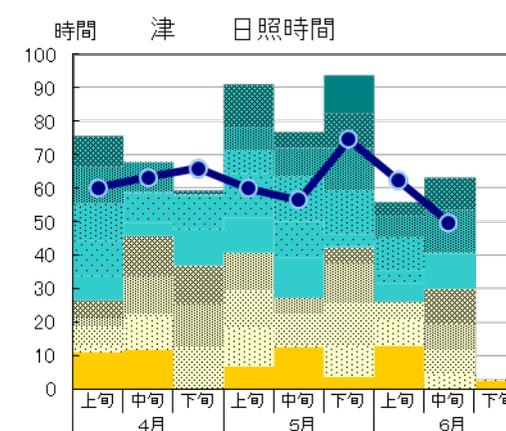
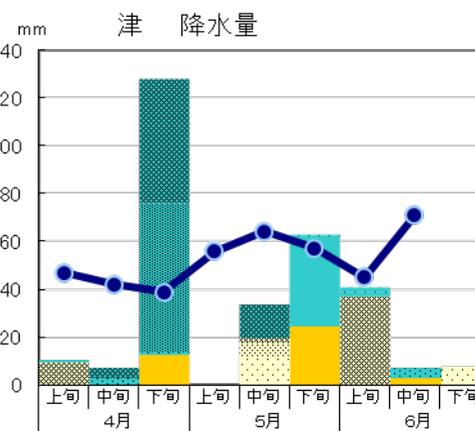
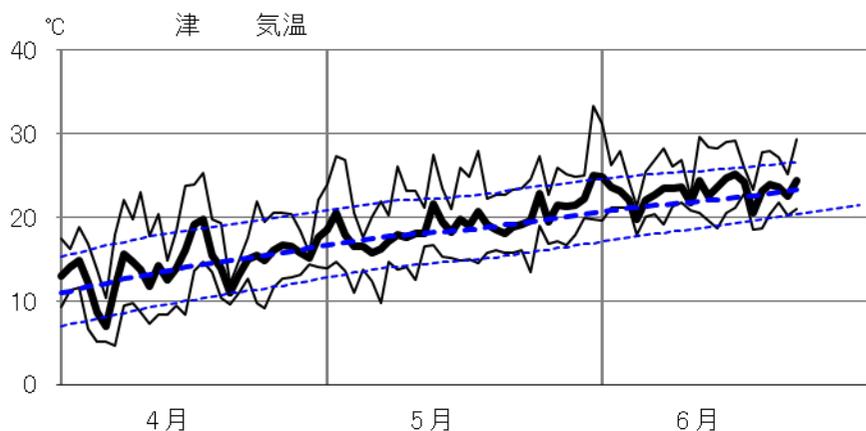
東海地方週間天気予報 (平成26年6月25日10時30分 名古屋地方気象台発表)

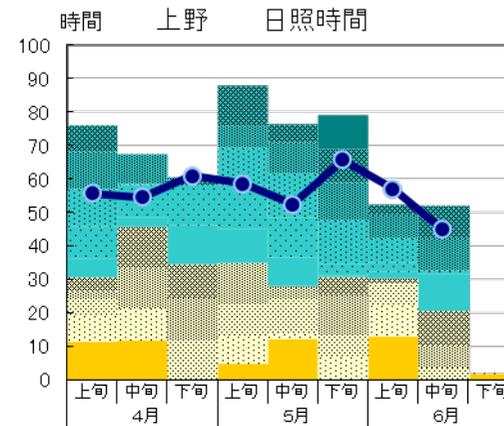
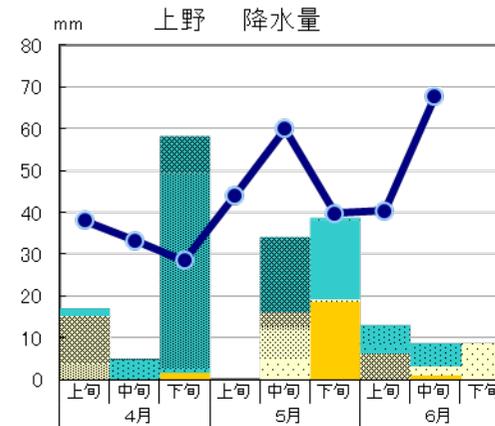
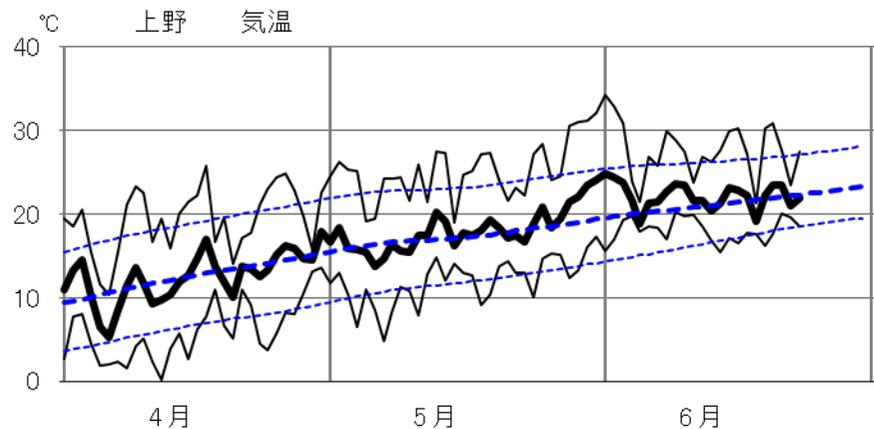
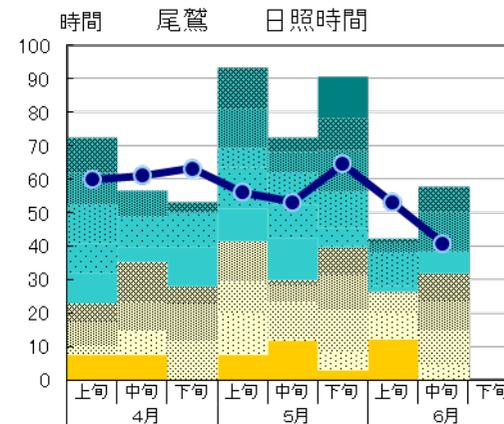
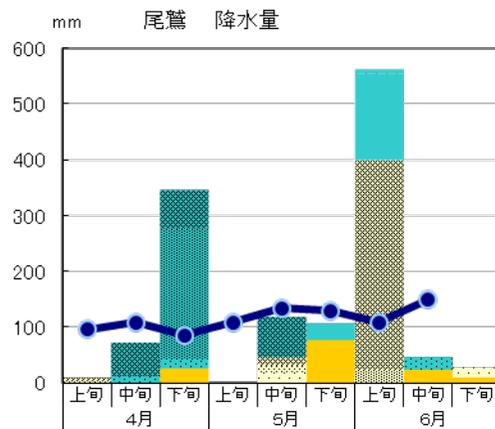
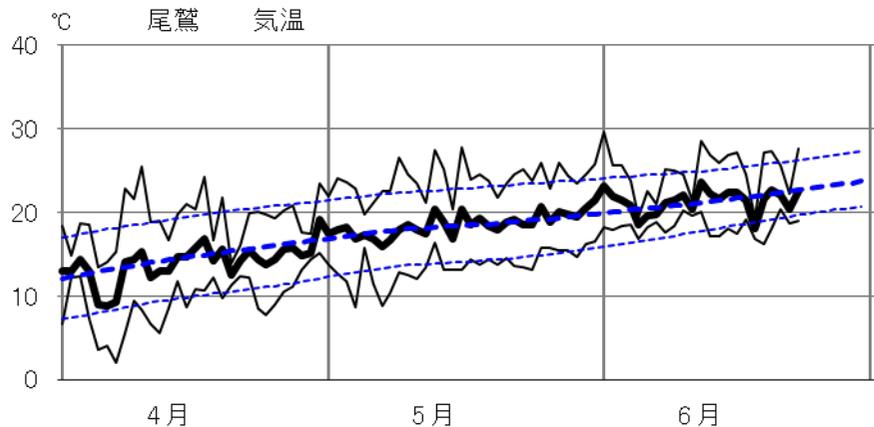
予報期間 6月26日～7月2日

向こう一週間は、期間のはじめは高気圧に覆われて晴れる日もありますが、その後は梅雨前線や低気圧の影響で雲が広がりやすく、中頃は雨の降る日があるでしょう。

最高気温と最低気温はともに、平年並か平年より高い見込みです。
降水量は平年並でしょう。

気象の日別推移 (気象庁発表データ <http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/index.php> から作成) (6月23日まで)





- 凡例
- 平均
 - 最高
 - 最低
 - - - 平年平均
 - - - 平年最高
 - - - 平年最低

- 凡例
- 31日
 - 旬10日目
 - 旬9日目
 - 旬8日目
 - 旬7日目
 - 旬6日目
 - 旬5日目
 - 旬4日目
 - 旬3日目
 - 旬2日目
 - 旬1日目
 - 旬平年値

- 凡例
- 31日
 - 旬10日目
 - 旬9日目
 - 旬8日目
 - 旬7日目
 - 旬6日目
 - 旬5日目
 - 旬4日目
 - 旬3日目
 - 旬2日目
 - 旬1日目
 - 旬平年値

7. おしらせ (前回と異なる項目には **NEW** の印があります)

1) 記載基準の注意点

平年ほとんど発生のないか非常に少ない病害虫については、平年並に少ない発生状態の「発生量平年比」を「平年並」、「発生量程度」を「小」と記述しています。

2) 発表日 **NEW**

本年度の病害虫発生予報は次の予定で発表します。

- 第1回 4月24日(木)(済み) 第2回 5月29日(木)(済み)
第3回 6月26日(木)(今回) 第4回 7月24日(木)
第5回 8月28日(木) 第6回 10月23日(木)
第7回 3月19日(木)

3) 利用方法

全部または一部をコピーして回覧・配布にご利用ください。ただし必ずページの右下にある「三重県病害虫防除所」の文字が入るようにしてください。

病害虫防除所ホームページには、この予報をはじめとして、不定期に発表される警報、注意報、特殊報、技術情報や、各種のグラフ、写真も載っています。下記のアドレスからお入りください。

<http://www.mate.pref.mie.lg.jp/bojyosyo/>

このホームページはフリーリンクです。リンクする場合、事前の承諾申請等は不要ですが、事後で結構ですのでメールにてご一報いただくと幸いです。

4) 本冊子の利用の手引き書

本冊子の見方を説明した「病害虫発生予報利用の手引き」があります。下記のアド

レスからお入りください。

http://www.mate.pref.mie.lg.jp/Bojyosyo/files/h26yohoteteki_.pdf

5) メール配信サービス

予報、警報、注意報、特殊報、技術情報が発表されたときに、ホームページに掲載されたという「掲載通知」を電子メールでお知らせしています。このメールの配信を希望される方は、下記のアドレスからお申し込みください。

<http://www.mate.pref.mie.lg.jp/bojyosyo/merumaga.htm>

6) 農薬登録状況の最新情報

農薬の販売や使用に当たっては、農薬登録上の制限があります。農薬の使用時はラベルをよく読んでください。次のインターネットサイトでは、最新の農薬登録状況が確認できます。

独立行政法人農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報提供システム」

http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm

7) IPM(総合的病害虫・雑草管理)実践指標について

三重県では IPM を実践する上で必要な農作業の具体的な取組内容を示した作物別の指標を公表しています。農業者の皆さんの取組について、現状把握と今後の気づきにご活用ください。病害虫防除所ホームページにリンクを設定しています。

三重県農林水産部農産物安全課ホームページ内

<http://www.pref.mie.lg.jp/NOAN/HP/work/ipm/main.htm>